

# 郷土室だより

## ポートピア'16

### —江戸湊のなりたち—

鈴木 理 生

この会場にくる前に、五、六人の人たちから、「ポートピア'16」ってのは「21」の誤植じゃないか？という、ご注意を頂きました。なるほどおおせの通り、この中央区の範囲でいえば、十年ほど前から区も一枚嚙んだ「大川端作戦」が計画され去年四月からは「大川端リバーシティ21」と看板が変わって、佃島の石川島播磨重工業の工場跡地の再開発が始まりました。

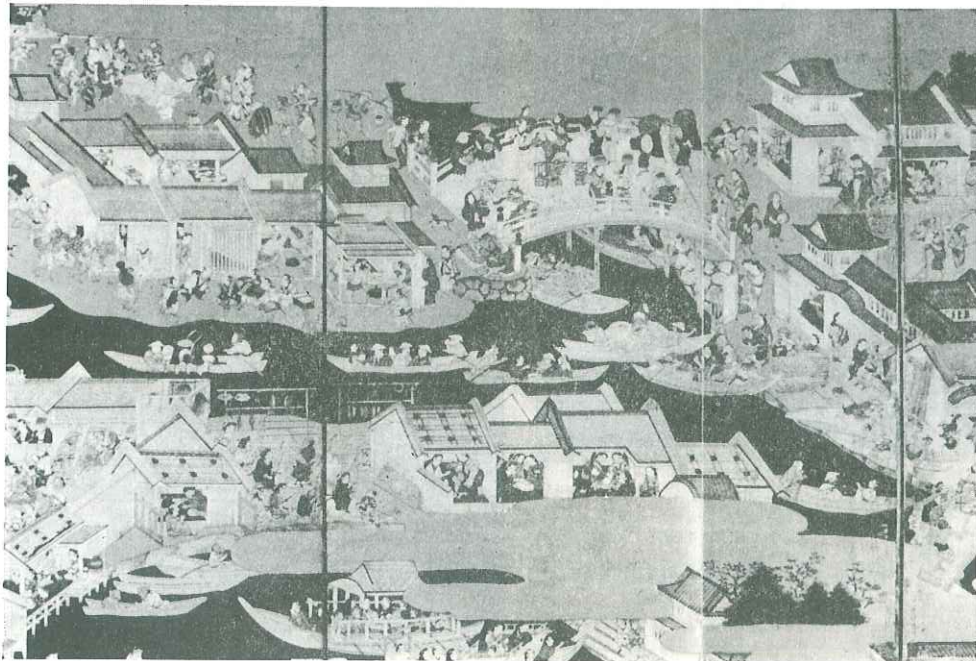
16だの21にこだわると、横浜市では昭和五十七年に横浜港再開発計画の名前を、市民から公募して「みなとみらい21」とつけて、賑やかにスタートしています。

横浜に負けず、いま東京でも東京湾の開発計画は花ざかり。去年一年間に国の省庁の案が五つ、東京都が二つ。ほかに政党・経済団体などの「民間」の計画が六つと、計十三件の計画が公表されています。それぞれの計画のタイトルと概略をお話しすればいいのですが、本筋からそれしますので、一つだけ東京都の案のタイトルを紹介しますと、「東京港の将来像—21世紀に向けての東京臨海部の再生—」というものです。そういえば今朝（昭和六十二年五月二十三日）づけの各新聞に、ま

た一つの東京大改造計画—新首都新島と三運河による—という都市計画も発表されています。そのどれもそのネーミング原形は神戸の「ポートピア21」のよう

に思われます。これでおわかりのように、いまちよつとまとまった都市計画は、いい合わせたように21世紀を目標にするのが流行のようです。

こういうことを承知で、今日のお話のタイトルを、あえて「ポートピア'16」と、四百年さかのぼらせて、16世紀の東京港、つまり今の中央



”江戸名所図屏風八曲一雙“より中橋辺  
（「江戸図屏風」（毎日新聞社）より）



○銀座と佃島

銀座の昔を語る本の多くに、銀座は遠浅の海を埋立てたなどと書いてあります。銀座四丁目交差点あたりを、昔は尾張町と呼びましたが、その町名の由来は尾張国の人々が、あの辺を埋立てたからだなどというお話を、広く知られています。

ところが実際は地図のように、銀座がのっかっている江戸前島は、本郷台地―駿河台と続く台地が、浸蝕されて低くなった場所です。これはビル建設の際のボーリングや、根切り（基礎を掘り下げること）で、地層や地質を直接観察すると、海ではなかったことがわかります。これと関連させてつぎに中央区が昭和三十九年に製作した『佃島』という映画をみていただきます。

まず佃大橋の工事場面に注意しますと、川の中に立てる橋脚工事の場面で出てくる土の状況を見ますと、海や河底の黒いヘドロではなく、案外にサラサラした赤い土であることがわかります。

つまり佃島も洲や埋立地ではなく、もとは江戸前島と一体だった土地なのです。この赤い土は、武蔵野台地の上の関東ロームと同質のものです。

余談になりますが浅草に待乳山（真土山）という山がありますが、あの山

も人工の山ではなく、武蔵野台地の一部が隅田川に削り残された部分なのです。佃島はその延長線上にあるともいえるのです。

もう一つ、この映画で気づくことは佃島の人々は水道ではなく、井戸を多く使っています。江東地区のようにゴミで埋立てた場所ですと、何百年たっても井戸の水は使えませんが、佃島の井戸の水脈は「本土」とつながっているので、飲用水として使えたのです。

○江戸前島の地主

図のように江戸前島は東は今の神田・日本橋・京橋。西は大手町・丸の内・内幸町が大体の範囲ですが、中世のこの場所の史料は意外に少なく、今日まで「歴史」的には空白の地域でした。

私はほかの事を調べているうちに、鎌倉の円覚寺がこの半島の地主Ⅱ荘園領主だったことを知りました。材料はタネも仕掛けもなく三一年（昭和三十一年）も前に出版された『鎌倉市史』の史料篇第二「円覚寺文書」中の「二二一三六」号文書です。それには今から六一〇年前の永和三年（一三七七）十二月十一日づけで、円覚寺の領地としての「武蔵国江戸郷前嶋村」が出てきます。

この史料の前後をあわせて読みます

と、江戸前島が円覚寺領になったのは少なくともそれより五年ほど前からのようです。そしてこれが徳川家康に取りあげられたのは、天正十九年（一五九一）四月八日以後のことのようです（くわしくは『鎌倉市史』をごらん下さい）。

つまり南北朝時代から室町時代、戦国時代を通じた約二一四年間、ここは円覚寺領であって、一般の武家の争乱には巻き込まれなかった地域でした。それゆえに権力史イコール歴史といった型の「歴史」の中では、大きな空白があったのです。

ではこの江戸前島を円覚寺はどのように利用したのでしょうか？ 高潮がくれば水びたしになるこの低地では農業はできません。利用するとすれば、濠以外にはありません。

京の五山も、円覚寺もその一つである鎌倉五山の寺々は、室町時代には海外貿易をほとんど一手に握っていました。これはそれこそ歴史上よく知られた事実です。この辺の事情を私はかつて『江戸と江戸城』（新人物往来社昭和五〇年刊）で、くわしくふれましたが、江戸前島は平安時代末期から、関東はじめ東北日本の最大の濠として成立し続けていたのでした。

さきにも申しましたが、太田道灌が

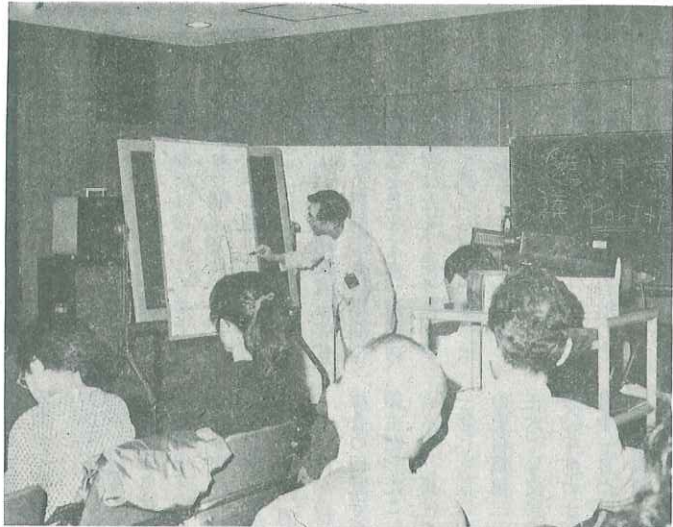
江戸に進出できた最大の理由は、円覚寺で代表される海外貿易業者の傭兵隊長としての赴任だったのです。このような状況は洋の東西を問わずに起るものらしく、イタリアの「江戸」ともいうべきヴェネツィアの場合にも、道灌より三〇歳ほど歳上の傭兵隊長カルマニエーラ（本名フランシスコ・ブッソネ）の運命が、あまりにも同時代の道灌によく似ていることでわかります（これも関心のある方には堀田善衛氏の『聖者の行進』（昭和六十一年筑摩書房）をごらんになることを、おすすめいたします）。

○鍛冶橋人

海外貿易基地としての江戸前島にはもう一つのエピソードがあります。大正二年に江戸以来の鍛冶橋を近代化する時、これもやはり橋脚部を掘り下げた際に、濠の底から二三個の人間の頭骨が出ました。専門の鈴木尚先生によりますと、どれもが中世、室町時代の骨と判定され、鍛冶橋人と名付けられました。そしてその中の三個は重症梅毒にかかり、鼻はもろろん額の部分には孔があいているほどの患者の骨でした。

いわば現代のエイズにも当る梅毒が日本に来たのは、土肥慶三氏の『日本

スライドや古地図などを使い熱演する鈴木理生氏



梅毒のくわしいことは略しますが、第一回にしろ二回目にしろ、感染してから鼻が落ち頭骨に孔があくほどになるには、相当の時間がかかります。それと当時の地球上の人間の移動の速さを考えますと、梅毒はヨーロッパからほとんどストレートに江戸前島に輸入されたといってもよいでしょう。

この状況も、江戸湊が武家中心の歴史には空白だったにもかかわらず、早くから有力な湊であったことを物語るものといえます。

より具体的にいえば鍛冶橋人たちは道灌亡き後から始まった関東の戦国時代の勝者である、小田原の後北条氏と、全く並立的な勢力だった円覚寺の、貿易活動に従事していた人々だったといえましょう。

### ○家康の江戸湊

16世紀末もせまる天正十八年(一五九〇)八月一日、徳川家康は江戸城の

城主として入城しました。これは彼の意志ではなく豊臣秀吉の命令でした。家康の最大の使命は、この東国最大の湊の江戸湊を、いかにうまく円覚寺から取り上げて、新しい時代の湊として再開発するかということにありま

た。さらに、より直接的・具体的な目標は、いま「独眼竜政宗」が流行っていますが、政宗たちの活躍の舞台である東北日本を、秀吉が天下統一するための兵站基地として整備することでした。

文禄慶長の役と呼ばれる朝鮮侵略が失敗し、秀吉が死ぬといよいよ家康の出番がまわってきます。しかし家康は五〇歳で江戸城主となり、七五歳で死ぬまでの後半生の二五年間、江戸にいた時期は延びてわずかに四年たらず大部分は大坂や伏見、そして駿府(静岡)で暮らしました。これで察するよう

に封建領主としての本拠は江戸でしたが、彼はその実力の源泉であった海外貿易については、駿府にいて、江戸をバックアップしていたことは、案外に無視されています。政治史的なことは略して、江戸前島と江戸湊に限りますと、その再開発の第一は江戸湊に働く人々の確保にありました。円覚寺領での領民支配は、一般の戦国大名とは大分様相が異な

た。でしようし、農民ではなく水上運輸業者ですから、下手な統制をすればみんな逃げてしまい、湊の機能は潰滅してしまします。ですからまずそうした人々を保護すると共に、摂津国(大阪府)から多数の水上運輸業者を江戸に招きました。

これが佃島やその対岸の旧深川地区の開発の指導者の森孫右衛門や深川八郎右衛門であり、いまの室町には尼崎からきた尼崎一族が住みつくようになりました。

第二は軍港と商業港の分離でした。それは江戸城の真下の日比谷入江を軍港にし、江戸前島の東岸は商業港にしたのです。

そして軍港にはオランダからリフデ号で来日した家康の砲術顧問のヤン・ヨーステンを住ませました。彼の名を漢字では八代洲、その住居が八代洲河岸です。いまの丸の内一三丁目

の濠端に当ります。そしてこのヤヨス名が残っています。商業港には同じリフデ号で来た航海長のウイリアム・アダムス……つい五・六年前に米国で彼を主人公にした『将軍』という小説や、その映画がテレビで放映されました。彼は家康の外交・通商顧問として重

梅毒史』によれば永正九年(一五二二)だといわれます。

これはコロンブスがアメリカ大陸から梅毒を持ち帰ってから二〇年目に当ります。そのうち日本では戦国時代が始まり、信長が勢力を持ちはじめた永禄六・七年(一五六三・四)にも第二回目の大流行があったと記録されています。

用されたことは有名です。家康は彼にその名にちなむ安針町を与えました。

そこはのちに日本橋魚河岸の一部になっていったことは、まだ記憶されている方があるかと存じます。

また南蛮人と呼ばれた、これら西洋人だけではなく、いまの銀座八丁目には中国の貿易商の八官に与えた八官町もあり、江戸湊は17世紀初めにはすでに国際色が豊かでした。

さらに日比谷入江の皇居側にいた千代田・宝田・祝田・福田などの集落の人々は、江戸湊の商業港の部分に移され、大伝馬町・小伝馬町・南伝馬町などの陸運業者の町をつくらせています。

○水路のバイパス

家康が江戸建設の第一にやった工事は、当時の関東最大の製塩産地行徳と江戸を結ぶ水路を確保することでした。

塩は信玄と謙信の故事を引くまでもなく、重要な戦略物資だったことは、いうまでもありません。この水路が江東地区の場合は小名木川、中央区側では日本橋川と道三堀でした。小名木川は当時の海岸線を水路にしたもので、日本橋川と道三堀は地図で明らかのように、行徳直通の水路であると同時に江戸前島の東岸と西岸を結ぶバイパス

でもありました。

前にも申しましたように、水上交通が当時の大量輸送の唯一の手段ですから、このバイパスの効果は大きなものでした。これ以後現在まで、日本橋が江戸―東京の商業の中心地になったキッカケは、このバイパスの工事だったのです。

家康が関ヶ原で勝って天下を取り、幕府を開いたのが慶長八年（一六〇三）です。それから三年後の慶長十一年に、軍港日比谷入江は埋立てられ、ここの中に西九下と呼ばれた幕府の閣僚たちの官邸地帯が造成されました。もはや城に接した軍港は不用になったことと、なまじ港があると万一敵船が入ってきて艦砲射撃や敵前上陸をされてはたまらないから、港をつぶしたのです。

そのかわり新橋土橋から教寄屋橋、さきの鍛冶橋をへて呉服橋間の、江戸前島の尾根、いかえると背骨に当る部分を掘って、城の濠と商業用の水路を兼ねる外濠をつくりました。こうして江戸湊は江戸前島の東岸の商業港を中心に、それにふさわしい整備が行われて新しい発展をはじめました。

○埠頭の発明

それはどのような整備かというところ、

一つは滝野川―根津―不忍池―日

玉方池―日本橋堀留をへて、江戸橋附近に河口をもつて

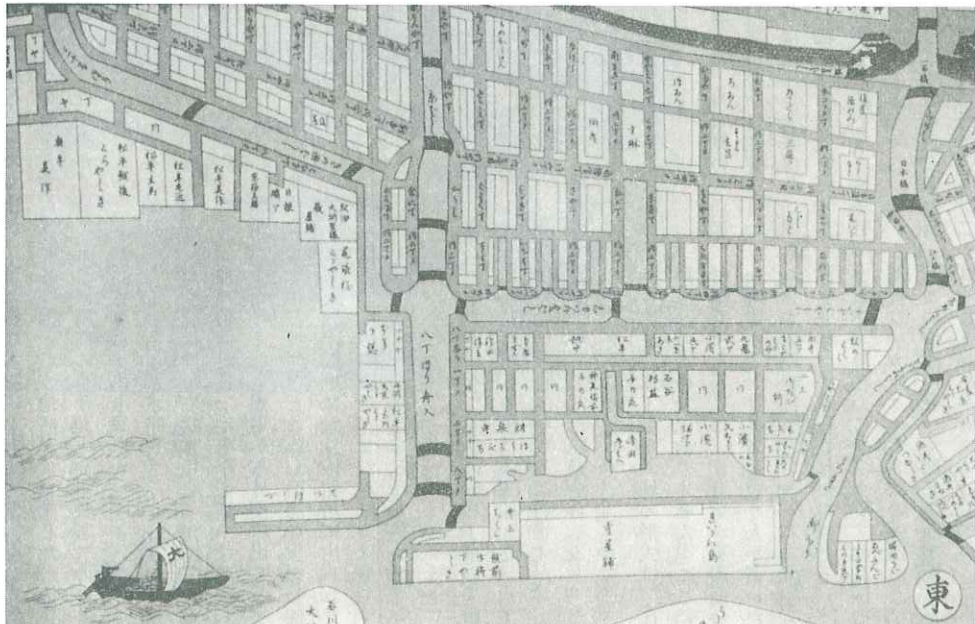
いた石神井川を、王子で現在のよ

うに隅田川に落し

た（のちに運河神田川でも放流した）。これは洪水のたびの湊の被害と土砂の堆積を防ぐためでした。

一つは江戸前島の東岸に埠頭をつくった事です。図の町名で

「武州古改江戸之図（承応二年） 東京市史稿 皇城篇附図」より



八丁目の間に一本づつ舟入堀が切り込まれているのがそれです。現在の江戸橋インタチェンジから京橋ランプまでの高速道路に沿った場所です。

この舟入堀の形は、明治まであった幕府の浅草の米蔵にも見られますし、多くの江戸図屏風にも必ずず刻明に描がれています(スライドを映写する)。

中央区の場合、この舟入堀の形はいまでも町割や土地台帳に、はっきりと名残りを見せています。

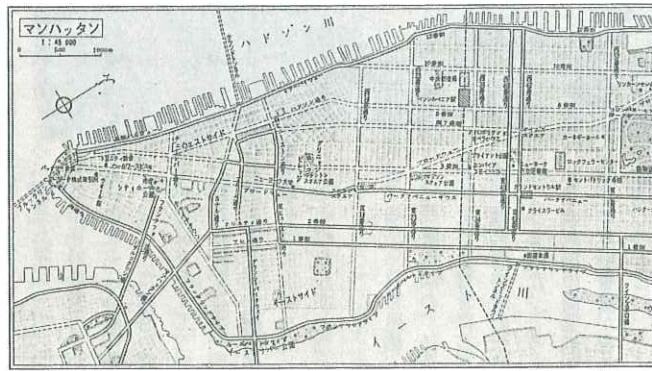
さらに注目したいのは、さきの道三堀と同じ発想で、江戸前島には二本の水路バイパスも作られます。一は日本橋と京橋間にあった中橋の下の水路のち埋立てられて中橋小路となるものです。

一つは大根河岸があった京橋川で、ともに江戸前島東岸から、鍛冶橋のかかる外濠に通じる水路で、さきの八本の舟入堀とあわせると、東岸は櫛形に掘られたといっってよいでしょう。今は埠頭といえは多くは陸から海に突き出す形につくられます。その典型がニューヨーク市のマンハッタン島にみられます。

しかし17世紀初めの江戸では、そうした技術はまだなく、陸を掘り込んで埠頭をつくったわけです。こうした工

マンハッタン市街図

〔大日本百科事典 別巻  
世界大地図〕(小学館)より)



法の違いはあっても、櫛形の埠頭という発想は、共通なのが面白いところで、(スライド映写)。

それまでの海岸や河口の舟付き場はたいがいが遠浅でした。したがって船を直接陸に接岸することができませんでした。ところが江戸城の何十万個という石垣の石は、大部分が小田原から

真鶴にかけての根府川石を運んできたものです。大きな重たい石を人力だけで運ぶためには、様々な工夫が必要でした。

その中の一つに石を船に積み込んだり、陸揚げする時に、陸と船ばたの高差を無くして接岸させる工夫、つまり埠頭が考えられたのです。この埠頭の発明がなければ、あの巨大な江戸城は建設されなかったのです。

○八丁堀舟入堀

このような技術上の工夫によって江戸は発展を続けました。この地図は江戸のまとまった地図としては最古の『武州豊嶋郡江戸庄図』です。俗に「寛永江戸図」と呼ばれるもので、内容は寛永九年(一六三二)当時のものです。第1図とは大幅に変わっていることがおわかりでしょう。

江戸前島に限ると、舟入堀の入口に橋がかけれ、対岸のいまの茅場町から八丁堀あたりは霊岸島と呼ばれ、埋立てが進行中の状況を示しています。霊岸島の大部分が寺であることも注目して良いでしょう。

その南側の戦後に埋立られる迄の桜川の位置に、細長く突き出た突堤が二本あり、その間の水路には舟入堀と書いてあります。この舟入堀の長さが八

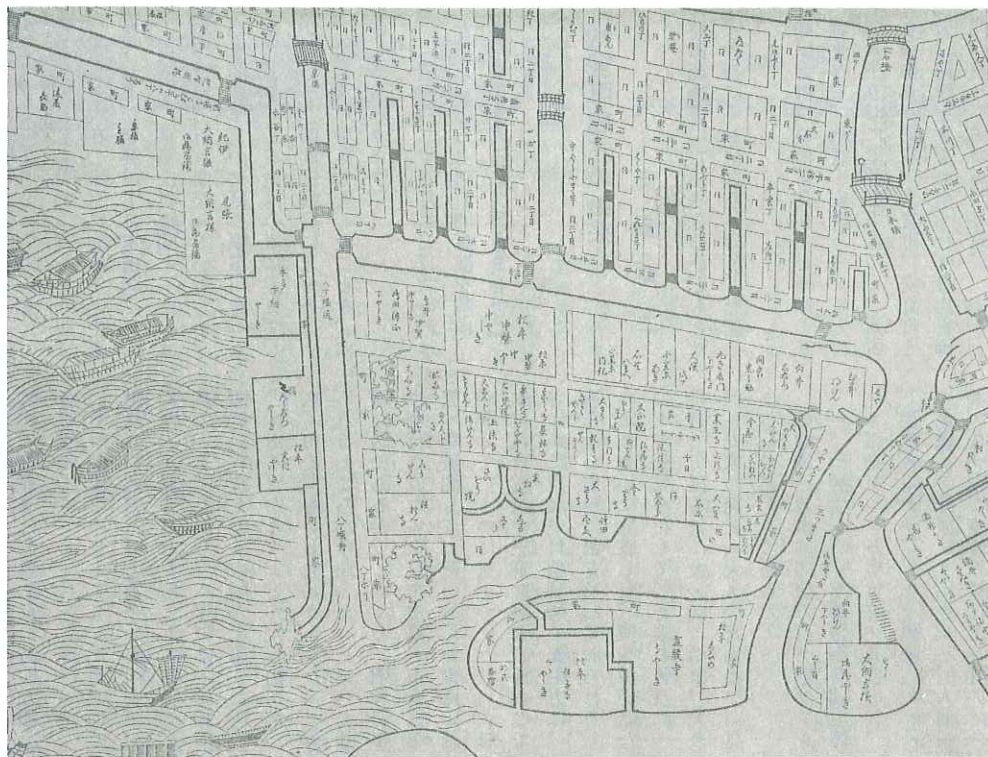
丁(約八六四メートル)あったために八丁堀という地名ができました。入口には幕府の舟手頭(海軍長官)の向井将監の邸もありました。

この八丁堀水路を進み、さきの京橋ランプの所で右折すると、かつての櫛形の埠頭を持った町が並びます。まっすぐ行くと京橋川から外濠に出られます。左折するとこれも旧海岸線を整備した三十間堀になり汐留川に出られます。その東側は、まだ地図では海ですが、ほどなく埋立てられて築地ができるわけです。

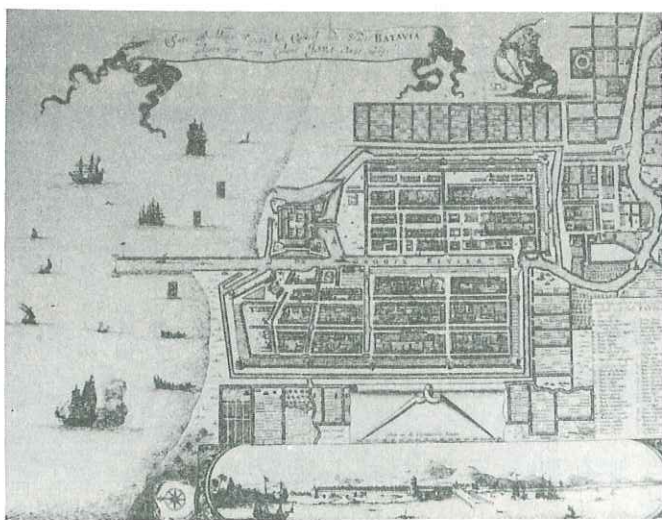
中央区は今でもこの旧八丁堀の入口に「湊」、舟入り堀に「入船」と「八丁堀」という町名を残していますが、いままでも申し上げた経過から見ると、実にピッタリの町名です。

さてこの八丁堀舟入堀の形式は、江戸だけのものではありません。ここに紹介する写真は、オランダ東印度会社所属のモンタヌスという人が書いた『日本遣使紀行』という一六六九年(寛文九年)に刊行された本にある、パタビア(現在のインドネシア共和国の首都ジャカルタの古名)の地図です。ここにも江戸と全く同じ「八丁堀」があることがわかります。

そして「八丁堀」の内側には、幕末に造られた両館の五稜郭によく似た砲



江戸時代・最古の地図  
 「武州豊嶋郡江戸庄図」(寛永九年)



バタビアの地図(一六六九年)

台があり、市内は江戸と同じような水路と町割で構成されています。  
 つまりこの「八丁堀」は敵艦が濠に直接横づけして砲撃することを防ぐものなのです。この工夫は江戸とバタビアのどっちが本家なのか、またほかの都市にもあったのかどうかは、今のところ私にはわかりませんが、あまりにもよく似た都市プランの一例として、ご紹介します。そしてこのような工夫

も、それぞれの都市の発達による埋立地の増加により、跡方もなく消え去って行きます。中央区の場合には、先ほど申し上げたように町名や地名に名残があるだけ、幸いだということになりそうです。  
 いま大流行の江戸―東京論においてその都市計画の分野では、「江戸は「の」字型プランで構成され、その渦巻きが無限に外方にむかって発展する

「という考え方とか思いつきが、いくつかの史料的・実証的批判にもかかわらず、いまだに市民権を持っていて通用しています。それぞれの論者が、その心の坎バスに、どのような絵を描こうと、それは自由なことなのですが、そういう「絵」に等しい論に事実を混同させると、いろいろな事柄に興味を持ったり、それを調べようとすると人々にとって、大変迷惑な結果をもたらします。  
 その意味で、今日はいまの大部分の江戸・

東京論の論者が、ほとんどふれようもしない、事実だけを紹介したわけなのです。

今日は、江戸前島のメインストリート、つまり現在の東京における「中央通り」が、なぜ神田—日本橋間、日本橋—京橋間、京橋—新橋間で、いわば不均等な形で折れ曲がっているのか、という問題や、中央区の隅田川をへだてた対岸の、江東地区の湊にふれずしまいという、時間的制約によるとはいえ、大きな片手落ちをしたことを、おわびしておわります。

（昭和六二年五月二三日に行われた東京を語る会第51回講演を基に、新たに書きおろして頂きました。）

## 八官町起立の由来

安藤 菊 二

戸田茂暉著『むらさきのひとのもと』は、巻初に「お城廻り」のことを記して、

和田倉御門の前を弥与三が河岸と云昔弥与三、八官、安針とて、三人の唐人下りしに屋敷を下さるゝ、其所を今弥与三河岸、八官町、安針町と云、河岸をすぐ南へ行ば日比谷御門、右ハ不明の御門と云、

と書いている。この本は記述が正確で江戸の地誌として重んぜられているのに、この記事はわれわれの持つ知識とかなり合わない。

それはまずそれとして、この三つの町は江戸八百八町と数多い町の中で、異国人が賜与された町としてよく知られている。しかし、八官町は、元和の頃に「八官という中国人に賜うた所」と伝えるばかりで、どんな理由があった、町を賜与されたのか、かいかも知られるところがなかった。たいへん迂闊な話であるが、このごろ、昭和三年

に刊行された『東京市史稿 市街篇第三』を披閲して、たいへん興味深い話が載っているの気がついた。『大日本史料』所収の記事を採録したものでさすがに東大史料編纂所の先生方は、珍らしい史料に眼を通しておられるものだと大いに感服した。興味深い話なので、受売りをして、奇談の普及に一役買って出る気になった。話は、大久保長安家の記録『大久保家別集』に見えるものだそうである。

忠輝卿へ越後国四拾万石ヲ進ラレンニ、十兵衛<sup>○大久保長安</sup>ガ御勝手向御用等ヲ相勤ケルニ万事重宝ノ者也トテ、御附人トナリ、元ヨリ忠隣<sup>○大久保ハ一老職ニテ他家ヨリ出タレバ、人前モヨク、殊に神君ノ御取立ニ預リタレ</sup>

バ、痒キ所へ手ノ届クガ如ク立身也。其頃忠輝卿出頭ノ家老ニ、花井主水<sup>後ニ通ト云者有。渠ガ父ハ唐人ニテ八官ト云。日本へ渡リテ主水ヲ設ケラルニ、容貌常人ニ越ケレバ、神君御小性ニ召出サレ、父八官モ町屋敷ヲ</sup>

被<sup>○今江戸ノ八官町是ナリ</sup>下<sup>○今江戸ノ八官町是ナリ</sup>と書き、さらに割註を加えて、花井主水は幼名を三九郎といった。美少年だった上に、小鼓や仕舞などをよくしたので、見出されて家康の御小姓の一人に加えられ、のち家康の二男忠輝卿として御稽古御相手を仰せつけられた。忠輝卿の実母はつの方、この方はのちの於茶阿様であるが、この方が遠州金谷におられたところに設けられた女子がある。（於はつの方は三九郎が気に入って）、その女子を三九郎に嫁がせた。三九郎は忠輝卿の妹婿となり、叙爵して遠江守を受領した、と書いてある。

三九郎ははからずも將軍家の御縁の端につながる高い身分の人となった。三九郎の父は中国人だけれども、息子が立身出世をしたので放つてもおかれず、江戸市中に一町を附与して町名主になつたものと見える。それが八官町なのである。八官町の名は江戸時代から明治・大正と続き、震災後の区画整理による町名改正で、昭和五年三月、

銀座八丁目内となつて解消し、戦後昭和四〇年四月の住居表示改正によつて銀座八丁目内となつた。二番地から四番地にかけての土地がその旧地で、八官神社にその町名の名残りをとどめている。

八官の名の出て来る史料は、もう一つ、『御府内備考 卷八十三』桜田の兼房町の名主平十郎の書上がある、こういう記事である。

但名主平十郎代々所持仕候手水鉢有之、右品持伝え候訳柄之義者、承応之頃米舶致候南蛮人を世話仕候事有レ之候而、八官と申者より貰受候よし。右品者唐銅ニ而深キ摺鉢様之物ニ有レ之候。其分(余カ)先祖より持伝候物有之候得共、類焼之度焼失致、右鉢斗者類焼之度々、井戸之内或ハ堀之内等ニ有之焼残候よし、右銅色古雅之物ニ候得者、他家ニ譲遺候得共又々家内之戻候よしニ而、今以持伝罷在候。

これは文政十一年の書上で、このころまでは八官から貰つた唐銅の鉢を伝えていたのである。

〔燕石十種〕付録 第4号  
〔中央公論社〕より  
（「ポートピア16」の本文中に登場する「八官町」についての参考資料として掲載しました）